

第三項理論と国語教育についての緒論

キーワード： 第三項 他者 世界観レベルでの自己の変容 広島大学大学院・院生 渡邊皆仁

0. はじめに

論者は、人間がよりよく生きようとするときに、世界観レベルでの自己の変容の必要に迫られると考えています。個人が生きている世界、そしてその世界を現象させている自己の世界観を変容させることが、個人の発達の過程で必要になり、それを乗り越えた先に、よりよい人生が拓かれると考えています。論者は、この世界観レベルでの自己の変容を可能にしてくれる学習方法を求めて、国語教育の領域で研究をしています。(していこうと考えています。)

論者が今研究しているのは、第三項理論という、文学理論です。この第三項理論は、文学研究者である田中実氏によって提唱された、文学作品を読むことに関わる理論です。論者は、この第三項理論に提示された読み方を用いた文学作品の読みにおける文学体験が、世界観レベルの自己の変容を可能にしてくれるのではないかと考えています。

本稿は、この第三項理論を用いて、文学作品の読みにおける読書行為について、論者がどのように捉えているのかということについて、論じることを主旨としています。

1. 第三項理論について

上述したように、第三項理論とは、文学研究者である田中氏によって提唱された文学理論です。

田中(2016)によれば、第三項理論は、次のような世界観認識を前提とします。

「我々に知覚できる客体の対象の世界はすべての領域が、主体のフィルターによって捉えられた客体の対象ではありますが、客体の対象そのものではありません(p.33)」

田中氏は、〈私〉の世界は、全て〈私〉の世界観によって捉えられたものであり、全ては〈私〉の中の他者であると捉えます。これに続けて、田中氏は、以下のように述べます。

「客体そのものが無いのならば、我々の捉える客体も無いことになるのですから、客体そのものは了解

不能で永遠に捉えられなくとも何らかの意味で存在しています(p.33)」

世界が〈私〉の世界観によってしか現象しえないとしても、現象すること、〈私〉が認識すること以前の領域があることは、否定することができないといえます。田中氏は、決して捉えられないこの領域を「第三項」と呼び、世界観認識に関わる文脈では主に「客体そのもの」と呼び、読書行為に関わる文脈では主に「原文」と呼び、コミュニケーションに関わる文脈では主に「了解不能の《他者》」と呼びます。これらはすべて、田中氏のいう世界観認識における「第三項」にあたります。このことから、第三項理論が、第三項を指定する世界観認識をすべての前提にしていることが分かります。

田中(2008)は、第三項を指定する世界観認識を前提として「近代小説」を読むことで、読者は、次のような体験をするといいます。

「読み手自身のフィルターを〈原文〉の影との相克・葛藤によって瓦解していく〈自己倒壊〉を实践させ、生の檻の中での〈自己教育〉を促すことになるのです(p.11)」

田中氏は、「原文」は永遠に捉えられないと述べていました。しかし、「近代小説」の読みでは、この「原文」が「影」として読者に作用し、読者の世界観が倒壊・変容する、「自己倒壊」という現象が起こるといいます。

このように第三項理論は、「第三項」を指定する世界観認識を前提とする理論であり、「近代小説」の読みに関わる複合的な理論であると説明することができます。

しかし、第三項理論については、理論的なことから読みの実際まで、説明に使われる用語の難しさも関わって、それがどのような読書行為を指しているのかについて、分かりにくいという実態があります。『文学の力×教材の力 理論編』(2001)における、田中氏と田近洵一氏との間で行われた座談会の内容は、この第三項理論の難解さという事態を示してい

と思われる。

先ほど確認したように、田中氏の論では、読者と文学作品との二項関係に、第三項として「原文」を加え、この「〈原文〉の影」に働きかけられることで、読者が世界観レベルで変容していくと主張されています。座談会において、田近氏は、この「原文」について、「その〈原文〉は、もしかしたら極めて素朴なもの、不完全なもの、あるいは主観的なものであって、それ自体見直されなければならないものかもしれない。読者の内に成立する作品世界としての〈本文〉は、そのような主観性の強い自己化した他者である〈原文〉に応じたものなのです (p. 102)」と述べ、田中氏の言う「原文」を主観的な領域に属するものとして捉えています。これに対して、田中氏は、「田近さんは私の言う〈原文〉を「主観性の強い自己化した他者」と理解されているようですが、もしそうだとするとこれは私の〈原文〉という概念とは全く別のもの、それでしたらむしろ〈本文〉のほうにあたります (p. 103)」と述べて、田近氏による「原文」の捉え方を否定します。この両氏のすれちがいから、「原文」という概念が何を指しているのかについて、理解することの困難があるということが出来ます。「原文」が何を指しているのか分からなければ、当然、この「原文」という概念に関わる第三項理論の示す読書行為についても、分からないということになります。

このような実態を踏まえ、本稿では、第三項理論を国語教育の読みの理論として検討するための基礎的な試みとして、論者がこの第三項理論による「近代小説」の読みの読書行為を、どのように捉えているのかということについて論じてみたいと思います。

2. 第三項理論とコミュニケーション観

田中 (1999) では、「近代小説」というジャンルの文学作品に通底する問題について、次のように述べられています。

「人が人と接するとき、自分の捉えた相手の人物像と相手自身が必ずしも同じではないことは、誰でも時に体験し、知っている。そこからさまざまなトラブルやドラマも生まれる。自分の捉えている相手の像を超えて、相手との〈対話〉はいかに可能か、これに人々はその心の奥底で悩み、必死に耐え、生きているのではなからうか。例えば、現代のベストセ

ラー作家村上春樹を挙げてみると、村上がその小説で一貫して追求しているテーマもまた、この問題に向かっている。(中略 渡邊) いや、そう言えば村上春樹に限らない、森鷗外の『舞姫』の太田豊太郎とエリスとの間に、また夏目漱石の『こころ』の先生と奥さん(お静)との間に、あるいは我々の日常生活のなか、友情も恋愛も親子の間柄も仲間同士の関係も、自分が捉えた他者像は単に〈わたしのなかの他者〉に過ぎず、そこから人は抜け出すことはできない。そのことで人はそれとは明瞭に自覚し、意識しなくとも、日々悩み、傷ついている (pp. 262-263)」

〈私〉からみた他者は、〈私〉の世界観によって捉えられた他者、田中氏のことばで言えば「わたしのなかの他者」としてしか現象しません。私たちは、〈私〉の世界とは異なる世界を生きている他者たちと共存していきたいと願います。しかし、〈私〉は、自己の世界観から捉えた他者にしか出会えないのです。このような感覚は、恋愛においてよく経験されるのではないのでしょうか。

相手が自分のことをどう思っているのかが知りたい。〈私〉は恋い焦がれる他者の内面を知ろうとして、他者を見つめますが、結局、他者が〈私〉のことをどう思っているのかは永遠にわかりません。他者が〈私〉に向けた〈ことば〉を、〈私〉のもつ他者への不信によって染め上げるとき、〈私〉は他者の愛を受け取ることはできず、他者と〈すれちがい〉、他者と傷つけあうでしょう。

また、長年連れ添った夫婦関係においても、〈すれちがい〉が潜在的に存在する場合があります。一方が結婚生活に幸せを感じ、相手も自分と同様に幸せだろうと思っていたら、ある日突然に別れを切り出される。別れを切り出された側は、自分と他者との生活に一体どんな問題があったのか理解できず、他者との関係を失ってしまいます。

このような〈すれちがい〉は、家族や友人、教師と学習者などあらゆる他者との関係において生じます。

〈私〉たちは自己の世界観から抜け出すことはできません。しかし、〈私〉の目の前にいる他者は、〈私〉とは異なる世界に生きています。〈私〉は、自己の世界観によって囲われた認識の檻の中で、他者と関係することに困難を抱えているのです。

このような生きづらさを問題として「近代小説」は描かれていると田中氏は言うのです。

難波（2015）では、上述した第三項理論に通底するコミュニケーション観に関わって、丸野（1987）における以下のようなコミュニケーションモデルを引用します。（図は丸野（1987）を基に論者作成）

図2 自己と他者とのコミュニケーションモデル

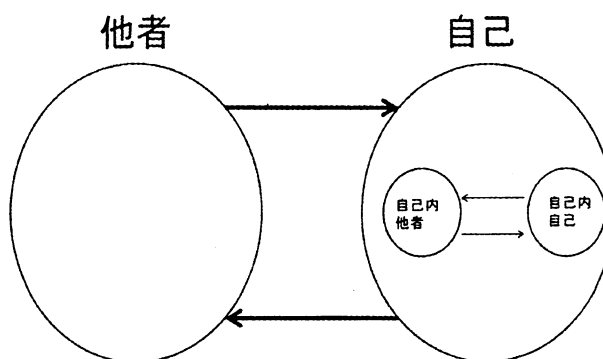
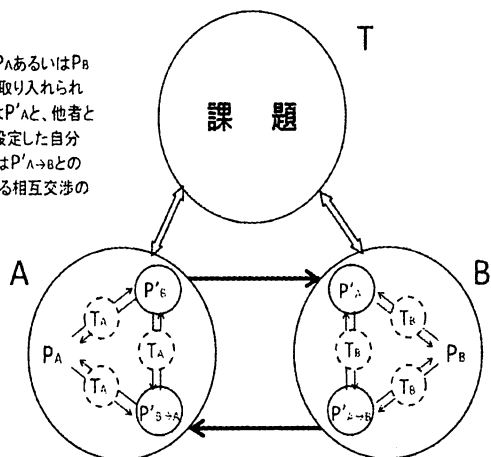


図1 二者の相互交渉過程に仮想される進行モデル 丸野(1987)より引用

第四段階:

・現実の自分 P_A あるいは P_B と自己の中に取り入れられた P'_B あるいは P'_A と、他者というかたちで設定した自分 $P'_{B \rightarrow A}$ あるいは $P'_{A \rightarrow B}$ との三項関係による相互交渉のはじまり



丸野が示すコミュニケーションモデルは、A あるいは B という主体が、自己を P_A あるいは P_B として認識し、A あるいは B という他者の関係において、他者を P'_A あるいは P'_B という形で認識し、他者の中の自己を $P'_{B \rightarrow A}$ あるいは $P'_{A \rightarrow B}$ として認識して、自己及び他者と関係しているというコミュニケーションの在り様を示したものです。図1から分かるように、A あるいは B という主体は、A と B という主体レベルでの関係をもっていますが、認識レベルでは、主体内における自己、他者、他者の中の自己と交渉していることとなります。

難波（2015）では、丸野（1987）で提示されているコミュニケーションモデルを参照して、私たちのコミュニケーションの在り様を、次の三項の関係で捉えようとしています。

- ①「私（あるいは私のなかの私）」（ P_A ）
- ②「私のなかの他者」群（ P'_B （私のなかの他者）と $P'_{B \rightarrow A}$ （私のなかの、他者のなかの私））
- ③B（外部の他者＝了解不能の他者）

①を〈自己内自己〉、②を〈自己内他者〉、③を〈他者〉と言い換え、この三項関係を表したものが、以下のような図になります。

この図2を用いることで、田中氏が言う「自分が捉えた他者像は単に〈わたしのなかの他者〉に過ぎず、そこから人は抜け出すことはできない」というコミュニケーション観がよく分かります。

〈自己〉は、〈他者〉と主体レベル、無意識レベルに関わっていますが、〈自己〉が認識しうるのは、〈自己〉の世界観によって現れる世界、すなわち〈自己内自己〉、〈自己内他者〉とが関係する世界になります。この〈自己〉内の世界に、〈他者〉の内面は現れることはありませんし、〈他者〉が現れることもありません。〈私〉たちは、他者と関わりながら、実際には、〈自己〉内の世界を見て、他者と言いつつ、自己の世界観によって脚色されて現れる〈自己内他者〉（＝「わたしのなかの他者」）と対話しているのです。

既存の〈自己〉の世界観によって、円滑にコミュニケーションが行われている場合、〈私〉たちが先述したような世界観レベルでのコミュニケーション不全に直面することはないでしょう。しかし、既存の〈自己〉の世界観で他者との関係性を上手く構築できないような事態に直面した場合、〈私〉たちは、世界観レベルでのコミュニケーションの困難に直面します。そして、「自分が捉えた他者像は単に〈わたしのなかの他者〉に過ぎず、そこから人は抜け出すことはできない」という問題を抱え込むこととなります。この時、〈私〉たちは、〈自己〉を変容させる必要に迫られます。しかし、いくら〈自己〉の内面の世界において自己内対話を繰り返したとしても、〈自己〉の世界観を問い直すことはできません。〈私〉は〈自己〉内世界の檻の中で、ますます他者を自己化していくこととなります。

では、このような〈自己〉の檻の中に居て、〈自

己)を問い直すことはできるのでしょうか。考えられる方法としては、〈他者〉の姿を見ることができれば、〈自己〉の世界観が相対的に明らかになるはずで、これは現実世界においては、不可能な行為に思えます。

田中氏によれば、「近代小説」は、他者が〈自己〉の世界観でしか現れてこないことに由来するコミュニケーション上の困難を克服しようとしています。これについて、田中(2001)では、次のように述べられています。

「小説の根本はAとBの葛藤(ストーリー)を〈語り手〉のいっこく堂が語るが、彼はAとBの二人の葛藤を一人で語るからAとBの本質は同じであるはずが、これを語りのなかで《他者》及び他者の問題を浮上させるという離れ業、ここに〈ことばの仕組み〉、文学の〈いのち〉が懸かっている。(p.6)」

ここまで論者は、田中氏が「近代小説」というジャンルについて、他者が〈自己〉の世界観によってしか現象しないというコミュニケーション観・世界観認識を前提としていると捉えているのだということを確認してきました。そして、田中氏によれば、「近代小説」は、これを前提とするだけでなく、本来は描けないはずの〈他者〉、田中氏の言葉でいえば「了解不能の《他者》」を抱え込むことによって、他者との〈すれちがい〉を問題化します。

田中(1988)では、〈他者〉について、次のように述べられています。

「私が考える〈他者〉という虚構概念は自己の意識から切れ、その彼方にあり、この概念装置によって照らし出されるのは〈自己〉であって、その意味で〈自己の仕組み〉を明らかにするのが、〈他者〉だと私は概念規定している(p.74)」

「近代小説」においては、この〈他者〉によって〈自己〉が問い直されることになると田中氏はいふのです。

田中氏の主張をまとめれば、「近代小説」は、図2で表したようなコミュニケーション観を前提とし、他者が〈自己〉の世界観でしか捉えられないことに由来する生きづらさを克服するために、「了解不能の《他者》」を抱え込んで表現しようとするものであるといえます。

それでは、このコミュニケーション観を踏まえて、「近代小説」における作品空間を構造化してみるとどうなるのでしょうか。

3. 「近代小説」の作品構造と読み

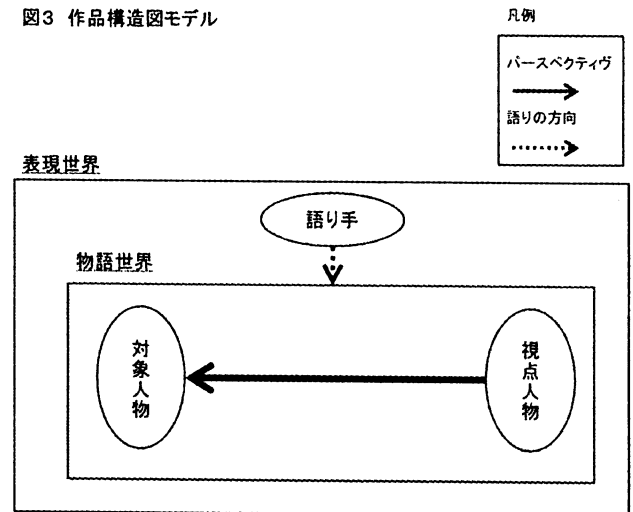
井島(1993)は、作品空間について、「物語世界」と「表現世界」という枠組みを提起しています。

井島では、「物語世界」とは「物語時」を始め、その中に広がる「物語空間」、さまざまな登場人物などが属する世界と定義されています。また、「表現世界」とは「表現時」、「表現空間」、話し手、聞き手などが属する世界と定義されています。この考えを用いると、登場人物たちの生きる「物語世界」と、その「物語世界」を語る語り手の生きる「表現世界」とに分けることができます。

さらに、「物語世界」に生きる登場人物については、西郷(1991)で指摘されているように、登場人物は、見る人物である視点人物と、見られる人物である対象人物にわけることができます。

これらを踏まえて作品空間を捉えると、次のようになります。

図3 作品構造図モデル

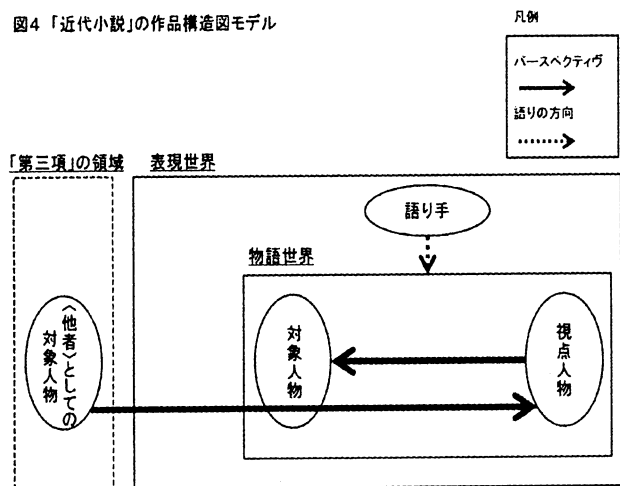


「表現世界」に住む語り手は、そこから「物語世界」を語ります。語り手は、ある登場人物の視点から、時にはその人物の内面に入り込んで語ります。見られる人物である対象人物は、語り手の語りや視点人物のパースペクティブを通して語られます。図2との関連で言えば、物語はすべて、語り手あるいは視点人物の〈自己〉内世界の領域に属します。すなわち、対象人物は〈自己内他者〉ということになります。

では、第三項理論でいう「近代小説」の作品空間は、前述したコミュニケーション観を踏まえるるとどのようなのでしょうか。他者が〈自己〉の世界観によってしか現象しないというコミュニケーション

観を前提とすると、視点人物あるいは語り手から見た世界に現れる対象人物とは別に、その世界観では捉えられない、〈他者〉としての対象人物が存在すると考えることができます。〈他者〉としての対象人物が属する次元を、「第三項」の領域として構造化すると、先ほどの図3は次のように変化します。

図4 「近代小説」の作品構造図モデル



「表現世界」から語られる対象人物や「物語世界」は、語り手や視点人物のもつ自己の世界観によって捉えられたものと考えられます。図4には、この世界観に捉えられる以前の〈他者〉が属する次元として、「第三項」の領域を措定しました。これに加えて、図では、〈他者〉としての対象人物のパースペクティブを書き込みました。

図2で示したコミュニケーションの在り様から考えると、物語は、語り手や視点人物のパースペクティブで捉えられた出来事であり、彼らの世界観によって構成された世界です。しかし、〈他者〉としての対象人物のパースペクティブから見れば、当然、同じ出来事は、異なった物語として現象します。「第三項」を措定するコミュニケーション観・世界観認識を前提として描かれた「近代小説」には、この〈他者〉としての対象人物のパースペクティブが存在しています。これについて、例えば、田中（1996）では、『舞姫』において、語り手「太田」に要約されることなく語られる「エリス」の第二書簡の存在を指摘します。〈他者〉としての対象人物「エリス」から向けられた〈ことば〉が、語り手/視点人物「太田」に捉えられることなく存在しているというのです。田中氏のこのような読みから、「近代小説」は、〈他者〉からは語れないという困難を抱えつつ、その格闘の末、〈他者〉の痕跡としての〈ことば〉を

表現しようとしていると考えることができます。

「1. 第三項理論について」で確認したように、田中氏は「近代小説」の読みについて、「原文」を措定し、読みにおいては、この「原文」の「影」が、読者に働きかけるとしていました。田中氏はこのような「近代小説」の仕掛けを「ことばの仕組み」と言っています。これについて、図4を参照にすると、どのように捉えることができるのでしょうか。

「原文」は、「第三項」の領域に属する〈他者〉としての対象人物と考えられます。先ほど確認したように、「近代小説」には、この〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉が何らかの形で表現されていると考えることができます。これを踏まえて、論者は、田中氏のいう「〈原文〉の影」に当たるものが、〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉であると考えました。

「近代小説」を読む読者は、この〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉を聴くことによって、「自己倒壊」という変容を起こすと推測できます。

では、この〈他者〉の〈ことば〉を読むには、どのような読み方が求められるのでしょうか。田中（2008）では、「近代小説」を「物語+語り手の自己表出」と定義します。そして、「語り手を超えるもの」から、「語り手の自己表出」を読むという読み方をすることで、「近代小説」の読みの端緒が拓かれると述べます。では、「語り手を超えるもの」とは、何を指すのでしょうか。

図4の作品構造図を見ると、語り手が物語を語り、その語り手の捉えられない領域に、〈他者〉としての対象人物が存在します。「語り手を超えるもの」とは、文字通り、語り手を「超える」のですから、語り手のメタレベルに存在すると考えられます。しかし、「近代小説」、例えば『舞姫』を読んでも、この「語り手を超えるもの」を見つけることはできません。「語り手を超えるもの」とは、いったい誰のことでしょうか。田中（2014）では、「近代小説」における語り手を超える語りについて、次のように述べられています。

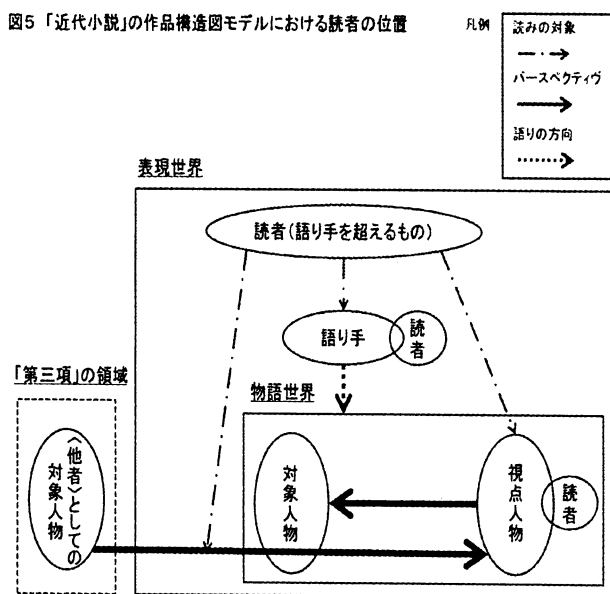
「〈語り手〉の捉えられない、闇の中の世界を聴き取るためにリスナーが〈語り〉を再構成するのです（p. 30）」

この言葉から、「語り手を超えるもの」とは、作中の語り手の、さらにメタレベルから登場人物たちの〈ことば〉を聴く、読者のことであると考えこ

とができます。読者が「語り手を超えるもの」であると考え、田中氏が、語り手の語り「語り手の自己表出」を捉えることの意味が分かります。すなわち、「近代小説」の読者は、クライアントである語り手の語りを、カウンセラーとなって聴く読者であり、この意味で、語り手の語りは、「自己表出」であると捉えることができます。カウンセラーとなった読者は、語り手の語りだけではなく、語り手・視点人物の捉えられない〈他者〉の〈ことば〉を聴くこととなります。

物語の読者は、語り手や視点人物のパースペクティブから、物語を読むこととなります。しかし、「近代小説」の読者は、「語り手を超えるもの」の位置から、語り手・視点人物・〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉を聴き、田中氏のいう「メタプロット」を構成するのです。

図4に「語り手を超えるもの」と読みにおける読者の位置を書き加えたものが、図5になります。



「近代小説」の読者は、「語り手を超えるもの」の位置に立ったときに、語り手・視点人物の〈自己〉を読み、〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉を読むこととなります。それは、語り手・視点人物の世界観で捉えられた世界とは別に、〈他者〉としての対象人物の世界を読むことであり、田中(2017)のいう「複数の世界(パラレルワールド)(p.7)」を捉え、相互に〈他者〉である登場人物たちの世界観レベルでの〈すれちがい〉を読むという事態です。

田中氏は、「近代小説」には、「語り手を超える

もの」(＝機能としての語り手)の語りがあると論じますが、図5の読みの対象を表す矢印を、語りとして捉えると、「語り手を超えるもの」が語っていると捉えることができます。読者が「語り手を超えるもの」を構成して、その位置から読むことを前提としているという点で、「近代小説」には、「語り手を超えるもの」が存在するという田中氏の論を追認することができます。

4. 「近代小説」の読みの文学体験

「近代小説」が、世界観レベルでの〈すれちがい〉を表現しており、読者が「語り手を超えるもの」の位置に立つことで、これを読むことができるとして、第三項理論では、読者はどのような文学体験をすると考えられているでしょうか。田中氏の言葉でいえば、「近代小説」の読みの文学体験は、「自己倒壊」という事態になります。この「自己倒壊」について、論者は、次のような三つのレベルの出来事として捉えました。

- ① 自己の物語の(信頼性の)倒壊
- ② 自己の物語を支える世界観の(信頼性の)倒壊
- ③ 世界観認識の(信頼性の)倒壊

これらについて、図5を参照して説明します。

まず、①についていえば、語り手・視点人物のパースペクティブに依拠する読者が読む作品中の出来事は、語り手・視点人物の世界観によって捉えられた物語です。この後、読者が「語り手を超えるもの」の位置から〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉を読むことで、〈他者〉としての対象人物の世界観から見た物語が構成されます。この時、語り手・視点人物から見た物語は、確かな(あるいは唯一の)現実認識ではない意味で、絶対性を失うこととなります。〈他者〉の物語によって、語り手・視点人物の〈自己〉の物語が相対化され、その物語の信頼性が倒壊します。

次に、②についていえば、①における物語の信頼性の倒壊によって、物語世界の対象人物が、語り手・視点人物の世界観によって捉えられたものであることが明らかになります。読者は、〈他者〉としての対象人物の〈ことば〉を読むことで、語り手・視点人物の捉えた対象人物と、〈他者〉としての対象人物との差異を読むこととなります。読者は、この差異を根拠にして、語り手・視点人物がどのような世界観をもっているのかを問うことができます。こ

の時、語り手・視点人物の物語を支えている世界観は、それが確かな（あるいは唯一の）現実認識を支える世界観ではないという意味で、絶対性を失うこととなります。〈他者〉の物語によって、語り手・視点人物の〈自己〉の物語が相対化され、その物語を支えていた〈自己〉の世界観の信頼性が倒壊します。

読みの過程、特に語り手・視点人物に同化していく読みの過程において、語り手・視点人物の〈自己〉と読者の〈自己〉の一部とが重なり合うこととなります。読者は、①と②における物語・世界観の倒壊を、登場人物の〈自己〉と重なる形で体験することとなります。

最後に、③についていえば、①・②の倒壊を通して、他者が語り手・視点人物の〈自己〉の世界観によってしか現象しないことを知ることができます。これを知った読者には、〈自己〉の世界観では捉えられない領域に、永遠に捉えられない〈他者〉が存在し、その内面に〈他者〉の世界・〈他者〉の心があることは明らかです。世界がどのような在り様をしているのかについて、読者のそれまでの世界観認識への信頼性が倒壊し、「第三項」を措定する世界観認識を獲得していきます。

論者は、「自己倒壊」を上述のように捉えました。

田中(2017)では、「近代小説」の読みについて、「〈言語以前〉を一旦想定し、そこから折り返す、自身の〈宿命の創造〉に向かう(p.5)」と述べられています。「近代小説」の読者は、「第三項」の領域の〈他者〉によって、語り手・視点人物を貫いて問い直されます。その読者が虚構の世界から現実世界に戻ることで、現実世界における〈自己〉と他者との関係の間にある〈すれちがい〉、その問題の所在に向かうことになるといえます。田中氏のいう「宿命の創造」とは、このような事態であると捉えます。

以上の考察を踏まえて、論者は、第三項理論を援用した読みの文学体験には、世界観レベルでの〈自己〉の変容の可能性があると考えます。

5. まとめ

本稿では、第三項理論の読書行為について、コミュニケーション観を軸にして捉えました。論者は、第三項理論の捉え直しにおいて、「自分が捉えた他者像は単に〈わたしのなかの他者〉に過ぎず、そこから人は抜け出すことはできない」というコミュニ

ケーション観と、「近代小説」の構造との関連を示すために、作品構造図を作成して説明しました。作成した作品構造図を参照して、論者は、第三項理論における「原文」が、作品中の〈他者〉としての対象人物にあたると考えました。

また、「近代小説」を読む読書行為を、読者が物語世界を語る語り手のメタレベルにあたる「語り手を超えるもの」の位置を構成し、ここから物語世界・表現世界に加えて、「第三項」の領域を読むこと、すなわち〈他者〉である対象人物の〈ことば〉や視点人物あるいは語り手の〈自己〉を読むこととして捉えました。

さらに、「近代小説」の読みの文学体験にあたる「自己倒壊」を、①自己の物語の（信頼性の）倒壊、②自己の物語を支える世界観の（信頼性の）倒壊、③世界観認識の（信頼性の）倒壊という三つの出来事として捉えました。

第三項理論を用いて、「近代小説」の読みの読書行為を上述のように捉えたうえで、論者は、第三項理論を援用した読みの文学体験には、世界観レベルでの〈自己〉の変容の可能性があると考えました。

6. 今後の展望

世界観レベルでの〈自己〉の変容に迫られたとき、村上春樹の小説の登場人物であれば、枯れた井戸や夢の世界あるいは異世界で〈他者〉と出会おうとします。失われたあるいは失われていた他者を取り戻すために〈自己〉と闘います。現代を生きる私たちも、他者と〈すれちがい〉、他者を失うことがあります。では、〈私〉たちはどのようにして〈他者〉と出会えるでしょうか。

論者は、現実世界において、〈他者〉と出会い、他者と共に生きることを「近代小説」に求めたいと思います。本稿は、これを国語科教育の授業で実現するための基礎的な試みとして、第三項理論の理論的な検討を行ったものになります。

今後は、第三項理論を用いた文学作品の教材研究や、授業方法の検討が段階的に行われる必要があると考えます。

引用参考文献

- 井島正博(1993)「物語と視点」『成蹊国文第26号』成蹊大学文学部日本文学科研究室 pp.17-43
西郷竹彦(1991)『〈現代教育101選〉34 虚構と

しての文学』国土社

田中実 (1988) 「〈他者〉へ」『日本文学第 37 巻第 7 号』日本文学協会 pp. 71-80

田中実 (1996) 『小説の力—新しい作品論のために』大修館書店

田中実 (2001) 「断想—読むことの倫理—」『日本文学第 50 巻第 8 号』日本文学協会 pp. 1-10

田中実 (2008) 「「読みの背理」を解く三つの鍵—テキスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして《語り手の自己表出》—」『国文学 解釈と鑑賞第 73 巻第 7 号』至文堂 pp. 6-16

田中実 (2014) 「続〈主体〉の構築—魯迅の『故郷』再々論—」『国語教育思想研究第 8 号』国語教育思想研究会 pp. 19-30

田中実 (2016) 「現実は言葉で出来ているⅡ—『夢十夜』「第一夜」の深層批評—」『都留文科大学研究紀要第 84 集』都留文科大学 pp. 31-56

田中実 (2017) 「〈第三項〉と〈語り〉/〈近代小説〉を〈読む〉とは何か—『舞姫』から『うたかたの記』へ—」『日本文学第 68 巻第 8 号』日本文学協会 pp. 2-14

田中実・須貝千里編 (1999) 『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 1』右文書院

田中実・須貝千里編 (2001) 『文学の力×教材の力 理論編』教育出版

難波博孝 (2015) 「合言葉は F」『日本文学第 64 巻第 8 号』日本文学協会 pp. 16-31

丸野俊一 (1987) 「社会的相互交渉モデルに関する理論的考察」『九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 第 32 巻』九州大学教育学部 pp. 41-64